

フルートとピアノのためのソナタ F.プーランク

Sonata for Flute and Piano
Francis Poulenc



プーランク

◆◆ 第4回

講師・有田正広

今回はプーランクのソナタの終楽章を見ていきます。

①冒頭の“Presto giocoso”ですが、“giocoso”というのは「楽しげに」「おどけて」といった意味です。2/4拍子の“Presto”で、非常に速いテンポで演奏されることになります。プーランク自身によって4分音符が160~168という軽快なテンポが設定されていますが、これは当初は付いていなかったもので、ランバルと演奏を作り上げる中で書き込まれたものだと思います。

冒頭のピアノのパートの“*ff* Très mordant”は、「常に鋭く」さらにそれを解釈するなら「躍動的」、「鋭さを伴った躍動感をもって」という意味に捉えることが出来ます。初めにピアノで演奏されるリズムはフランスの古い「ブーレBourrée」のような舞曲のテンポの性格を持っていると言えます。

ここに付けられた1拍目のアクセント、2拍目のスタッカートは、この曲の随所に見られる特徴的なものです。

②1994年版の21小節目にはそれが括弧で示されていますが、全てこの表情を充分に感じて演奏しましょう。また、2小節目には“sans pédale”（ペダルを踏まないで）という指示がありますが、ピアニストはこの指示を様々な部分に応用して、使用法を考えていくと良いでしょう。

この楽章のフルートのパートは第1、第2楽章に比べて、非常に高音域に偏った傾向を持っていますが、最初にプーランクがこの曲を構想した時には、これほど高い音では書かれていませんでした。例えば11小節目、26小節目、34小節目などは本来はオクターヴ下で書かれていました（これは構想の段階のことなので、94年版にも反映されてはいません）。それがプーランク自身によって、オクターヴ高く書き直されています。この変更にも、この曲の非常に明るく楽しげな表情の意味を込められていると感じられます。特に26小節目などはフルーティストにとっては、多

少やっかいな指使いになりますが、“giocoso”の雰囲気壊さないよう、ヒステリックにならないように演奏すると、全体に楽しげな感じが保たれると思います。

94年版と58年版（誤解しやすいのですが、58年版はプーランクが作曲後ランバルとの演奏を作り上げる上で手直したものの、そして94年版はそれ以前の元の楽譜を復元したもののなので、時間的な前後が逆転しています）との違いが3楽章にもあるので、まずそこから見ていくことにしましょう。

③例えば練習番号⑤から出てくるフルートの長いメロディーですが、58年版ではe[♯]-gis[♯]-a[♯]までが1つのスラー、そしてe[♯]-f[♯]-d[♯]-gis[♯]-h[♯]-e[♯]とスラーがかかり、中間で分けられています。プーランクは94年版に見られるように、当初これを大きなスラーで書きましたが、ランバルとの演奏によってこのスラーを書き分けることにしたのでと考えられます。ですから、94年版を使ったとしても、この書き分けられた2つのスラーのことを念頭に置いて

1994年版

① 3 Presto giocoso

♩ = 160-168

1958年版（第16版、1992年）

①' 3. Presto giocoso

♩ = 160-168

1994年版

② 21

1958年版（第16版、1992年）

②'

1994年版

③ ⑤

1958年版（第16版、1992年）

③' ⑤

1994年版

④

1958年版 (第16版、1992年)

④'

1994年版

⑤

1958年版 (第16版、1992年)

⑤'

て演奏すると良いと思います。ただし、その直後に出てくるピアノの同じメロディーはたつぷりと流れるように、変更はされていません。これは練習番号⑧の部分でも全く同じです。

④練習番号⑩には、94年版には“staccatissimo”とありますが、これはことさらスタッカーティシモにせずスタッカートでも良いし、58年版には単に“stacc.”と記されています。しかも、94年版で見られるように、当初はスタッカートの記号も付けられていましたが、58年版では記号は外され、言葉だけになっています。音楽的な発想から、それらを記譜しなくても良いであろうというプーランクの考えでしょう。

⑤練習番号⑪で、94年版ではピアノのパートは“pp subito”で、スタッカートの記号が付けられていて、58年版ではスタッカートの記号が外されていますが、この部分は当然スタッカートで、つまり「ペダルなしで”sans pédale”と書かれているので、その通りが良いと思います。⑥ただし58年版では練習番号⑩から3小節目(106小節)にfを置き、ピアノの左手のバスの音にアクセント記号を付けていますが、94年版にはそれらが付けられていません。そして、108小節目のピアノの左手はpのままですがCesの音にもアクセントが付けられていて、110小節目も同様です。このフルートのパッセージを補助するようなアクセントを念頭に置いて演奏するとより効果的になると思います。

⑦さらに練習番号⑫から4小節目(115小節)のフルート・パートのc'のロングトーンの中から58年版では“céder”が付けられています。この“céder”というのはテンポが「緩む」

という意味ですし、さらにその後にはデイミュエンドがあり、これには方向性を弱めるという意味もあります。

⑧練習番号⑬からピアノの4分音符と8分音符のリズムが出てきますが、58年版ではここはテンポが自動的にゆっくりしたもので演奏されるように考えられています。ところが94年版では「遅くならないように」“surtout sans ralentir”という指示が付けられ、115小節のような“céder”も付いていませんので、インテンポで演奏することになります。この部分では94年版と58年版の間にテンポの差が生じています。94年版で演奏する人はここではテンポを遅くすべきではないのですが、58年版を参考にする人はテンポは若干緩んだままで演奏することになります。

⑨そしてその「緩み」が、突然、練習番号⑮の“a tempo”で変えられます。プーランクによって冒頭のテンポ(160~168)が書き込まれていますが、元々の楽譜にはそれが無く、94年版では括弧書きになっています。また、ピアノのパートはここでも94年版では“staccatissimo”、58年版には“stacc.”になっていて、両方に「ペダルなしで”sans pédale”の指示が付いています。注意しなければならないのは、ピアノのパートを見ると150小節目の1拍目の裏には94年版でも58年版でもアクセントが付いていますが、151小節目のピアノの左手のfis'の音は94年版にはアクセントが無く、58年版には付けられていることです。これを付けることによって、フルートのパッセージのリズム感を補助する役割を与えています。またここからのフルート・パートは94年版にはfと書かれていますが、これは演奏効果を上げるためでしょう。58年版では149小節目はp、153小

1994年版

⑥

1958年版 (第16版、1992年)

⑥'

1994年版

⑦

1958年版 (第16版、1992年)

⑦'

1994年版

⑧

1994年版

⑨

1958年版 (第16版、1992年)

⑨'

⑩

167 **Subito le double plus lent** (♩ = 66)

⑩'

Subito più lento ♩ = 66

⑪

⑪'

⑫

節から *mf*、そして157小節目から *f* という風に徐々に音量を増加していきます。

⑩練習番号⑩の“Subito le double plus lent”は「突然、倍のテンポに遅く」という意味ですが、94年版で見る通り、元々は *ff* だったのに対して58年版では *f* に変えられ、指示も“Subito più lento”というイタリア語に変えられました。しかも58年版ではプーランクは、4分音符が66という明確なテンポを指示しています(94年版では括弧書き)。ピアノのパートでは169小節の1拍目、右手 *f* の音に54年版ではアクセントが付けられましたが、ここは「溜息」のようなアクセントにすると良いでしょう。そしてフルートのパートの170小節“mélancolique”の指示がある部分ですが94年版では *mf* ですが、54年版では *p* に変更しています。⑪また、練習番号⑪の1小節前も94年版では *f* ですが、54年版では *p* のままとなりました。

⑫189小節からのフルートの *e* のトリラーところの [*ff*] は54年版で付けられたものです。けたたましい *e* のトリラーを演奏しましょう。同じ部分のピアノのパートでは94年版では総ての4分音符にアクセントが付けられ、54年版では右手のアクセントが外されていますが、これは両方に付けても問題は無いと思います。

練習番号⑬からは冒頭で説明した通りです。

⑬195小節の2拍目の裏からのフルート・パートは94年版では *ff* になっていますが、54年版では *f* です。そしてピアノのパートの197小節の1拍目に54年版ではテヌートとアクセントを付け、199小節目も同じようにアクセントが付けてありますが、これは最初のテーマの提示と同じ考え方を使っています。

227小節からフルートのソロですが、時としてこの部分を遅くする演奏がありますが、ここには94年版も58年版も同様に“surtout sans ralentir”「特にテンポは遅くしない」という指示が付いているので気をつけましょう。

⑭さらに58年版では233小節から“Strictement en mesure sans ralentir”「厳格に特にこのテンポを遅くしない」と書いてあり、まわりくどい言い方ですが「インテンポで終われ」ということを言っています。これは58年版で付けられたものですが、94年版では「何故か」これが2小節前の231小節の真ん中から鍵括弧で付けられています。さらに面白いことに、58年版では232小節のピアノ・パート2拍目にアクセントが付けられました。これはアクセントを付けることによって、フルートのパートをリズムカルに導き出そうということでしょう。

⑬

195

⑬'

⑭

230

Strictement en mesure et surtout sans ralentir

Printed and bound in Great Britain by Caligraivng Limited Theford Norfolk

Hotel Majestic, Cannes
Décembre (56)-Mars 1937

⑭'

Strictement en mesure sans ralentir

8^{va} bassa.....

これらがだまかに見た94年版と58年版の違いです。この中のいくつかは音楽を大きく変える要素にもつながる変更です。それは前にふれた練習番号⑫以降の、フルート・パートに“céder”が付いて練習番号⑬からテンポが遅くなるかどうかという部分ですが、プーランクとランパルの相談の結果、ここでテンポを遅くすることにしようです。初めはインテンポのままの指示をしているのですが、練習番号⑮からの音楽的な表現を考えるならば、ここで若干テンポを遅くした方が練習番号⑬のピアノ・パートの性格が生きてくると考えられるので、これは大変音楽的な変更だと思います。その他のアクセント、アーティキュレーション、デュナーミクの変更の殆どは、音楽そのものについて、決定的な何かを変えるものは無いと思いますが、練習番号⑮からのデュナーミクの変更に関しては、やはりテンポのことと同じように意味があるものだと思います。

この第3楽章の演奏については、多くを説明する必要も無いほどお馴染みの曲ですが、“mordant”という「鋭く」「活発に」、しかも“giocoso”で「楽しげな」という言葉から、フルートもピアノも夫々の飛び跳ねる音は非常にスピード感のある音が要求されます。フルートのタンギングも、フランス人が19世紀の半ば以降に編み出した奏法——スタッカートのタンギングの時に両唇の間に舌を入れて、シャンパンの栓を抜くような「ボン」という鋭いタンギングを使って演奏すると良いでしょう。これはドイツのフルーティストには好まれないタンギングでしたが、フランスの音楽を演奏する時には大変有効だと思います。

またプーランクは、ピアノのパートでは初めのテーマに多少リズムの変化を付けています。例えば練習番号①からの部分に見られるようなシンコーション、シンコープされた裏拍の弱拍の音にアクセントを付けるということで“giocoso”の表情をより強めていると言えます。



1994年版



1958年版（第16版、1992年）

この曲の主だった性格は、練習番号⑤までの飛び跳ねるような躍動的なリズムと、練習番号⑤からの、印象的なプーランク独特の切れ切れの短いメロディーにあり、ここでは息のスピードをゆっくりと、そしてたっぷりと歌い上げますが、テンポは遅くならないように注意しましょう。また、練習番号⑨の前で一瞬3拍子になりますが、2拍子が続いてきた所に1小節だけ3拍子が入る、この拍子の違いを面白く演奏しましょう。そのためには、練習番号⑨の1小節前の2拍目の裏にある休符を充分に感じ、3拍目の16分音符の頭をためて、2/4拍子に戻る次の小節ではまた1拍目をピタッと合わせるように、また3拍目のアウトタクトによって次の2/4拍子の躍動的な性格を再び演奏できるように軽く演奏すると良いでしょう。

練習番号⑬からは、前のテーマの躍動的なリズムの対極にあるようなテヌートで、雰囲気を充分に作りましょう。ただし、プーランクの当初のアイディアだった「特に遅くしないで」という指示が頭の中をかすめます。ですから、たとえ“céder”しても——“céder”はリタルダンドではないので——ほんの少し緩んだ感じでこの表現を出すように心掛けて下さい。練習番号⑮からは元のテンポにピタッと戻しましょう。

練習番号⑯の後に第1楽章のメランコリーなテーマが突然出てきます。この3楽章全体では、切り立った、鮮やかな、輝かしく透明感のある、そしてスピード感を持った音がほしいのですが、この部分だけは陰鬱なほやけた音

色が要求されます。

177、183、187小節に見られるe^{'''}-c^{'''}-e^{'''}-c^{'''}-e^{'''}の音型ですが、Eメカニズムの付いていない楽器を持ったフルーティストには非常に難しいと思います。この音型をスラーで演奏しようとする、c^{'''}の音が割れてしまったり、e^{'''}の音が壊れてしまったりしがちですが、e^{'''}の音をどんな弱音でも出せるように常に訓練しておいて、軽いアクセントと速い息でe^{'''}の音を吹き、e^{'''}の音が出た瞬間にc^{'''}の指使いになるようにすると、上手く解決できます。

そして練習番号⑱以降は、どんどん終わりに向かって突き進むようにすると良いでしょう。練習番号⑳からは練習番号⑬と同じメロディーが出てきますが、ここではテンポは遅くしません。

終わりに向かっては、プーランク自身によって「特に遅くしないで」と指示され、さらに最後の4小節には「拍は厳格に、そして特に遅くはしない」と書かれているので、ここはむしろテンポを速めていって終わっても良いと思いますが、わざとらしさは絶対に禁物です。

では、プーランクのソナタをお楽しみ下さい。



有田正広（ありたまさひろ）
昭和音楽大学教授
桐朋学園大学古楽器科講師